中山間地域における歴史実践とその問題

——経済成長と集落の変容の位置づけをめぐって——

Historical Praxis in a Depopulating and aging Village in Japan : Some Controversial Issues of the Postwar Economic Growth and Its Consequence

渡邊 悟史*

Satoshi WATANABE

The residents in many of the villages in hilly or mountainous areas in contemporary Japan have to confront pessimistic prospects on their life conditions. They are suffering from irreversible depopulation and ageing, the decline of the local economy, and the deterioration of farming land and forest. In this situation, a mind-set that the current and future situation cannot be improved prevails among the residents. By exploring the discourse and action of a man born in 1944, who is active to improve the life environment of a village which is located in the western part of Kanto region, this paper aims to examine the difficulty of his attempt to compete against the prevailing mind-set and to imagine the alternative history of the village. He is eagerly trying to collect and investigate forgotten pasts of the village which, in his theory, demonstrates the “communal mind” or the “harmony” of villagers which had existed before the postwar economic growth and then disappeared. The man insists that his investigation will finally make other residents recollect what they have forgotten and, as the result, the residents will be able to solve the contemporary predicaments. However, when the people like him, who belongs to the generation which built bases for their livelihood on the outside of the village in the period of economic growth, criticize the current situation, the other residents question the position of their discourses. Some say why they can dogmatically maintain their privileged position to blame others in spite that they are also responsible for the current predicament. Others even blame that most of the members of the generation once abandoned their duties for the village and played a central role in bringing down the current predicaments. In the course of examining this difficulty, the author would also pursue what kind of historical praxis, reorganizing the relation between the past and the present, is needed in the life in the period of the past economic growth.

1. 問題の所在

現代日本の中山間地域における集落の住民が持つ将来的な見通しは悲観的な材料に事欠かない。そこでは、集落は徐々に縮小、果ては消滅に向かっているのだという「方向づけられた現在」が住民たちの間で支配的な認識の枠組みのひとつとなりかねない。このとき、集落の歴史を再検討しながら「現在」を位置づけなおしていく作業は、このような枠組みに対抗するためには有効な戦略のひとつのように見える。本稿の主題は、自分の生きる時間をどのようなものとするかという難題に取り組んでいる、1944年生まれの人物の実践の可能性と限界、矛盾を検討することである。これを通じて彼の歴史実践の困難—

「歴史すること」、すなわち「過去」を把握しながら「現在」を同時に構築すること—を条件づけている、集落の現状を把握したいと考える。つまり現代の集落が、住民にいかなる「現在」を生きることを可能にしているのかというのが本稿の根底にある疑問である。

2. 研究の背景

(1) 歴史実践について

本節ではまず本稿で用いる「歴史実践」という用語について詳らかにする。周知の通り 20 世紀のさまざまな出来事や災厄に促される形で、歴史は次々と再検討や激しい論争の対象となってきた。論争の形態、深度は多様ではあるものの、一様にそこで問われた疑問は共通していた。それは、歴史とは何かと

*ブラハ・カレル大学大学院

ということのみならず、過去とかかわることで人間は何をしているのかという問いであった。こういった背景を受けてキャロル・グラックは「歴史すること (doing history)」の意味を次のように述べる。

私は歴史について (*about history*) 考えると同時に、歴史で (*with history*) 考えているのだと言ってもいい。……歴史は、社会認識による産物であり、その道具でもあり、自分たちの世界を理解するためにそれを用いるのだ。……過去についての観念は常に現在にあり、私たちの思考を動かし行動を促す (グラック、2007、3 頁)。

もちろんグラックが用いる「自分たちの世界」という語には注意しなくてはならない。鹿島徹は歴史の持つ 2 つの機能として「閉鎖的共同性の調達機能、他方でそれを相対化し突破する批判的機能」(鹿島、2006、X 頁) を指摘している。歴史を物語るということは、一方で過去を共有しているとされる共同体の立ち上げや境界の線引き、その権威づけにかかわる。何を史実とするか、どのような過去を保存・記憶すべきか、どのように過去を語るのか、どの語りが正統と見なされるべきなのかといった選別やアテンションの配分がそこで意識的に、無意識的に、あるいは制度的になされるからである。そこにはマイノリティや「他者」の抑圧・排除や強制された沈黙が伴う。その一方で「批判的機能」とは、マイノリティや「他者」だけでなく、忘却された事物、語りえないものの痕跡によって、歴史が複数化されていくような機能である。そのような歴史は、支配的な歴史によって規定されている現在に抵抗し、それを相対化する。ここで重要なのは、歴史に抵抗するとは単純に語りを更新するといったこと自体を超えた広がりを持っているのだということである。宇野邦一は次のように述べている。

歴史への抵抗は、歴史がさまざまな形態をとりえ、さまざまな歴史の歴史があることを前提としている。歴史に抵抗するとき、われわれは、歴史が一つないいくつかの決定的な形態をとってしまったことに抵抗するのだ。それがわれわれの思考や身体や存在自体にまで、不当な影響を及ぼしていると感じるのだ (宇野、2003、28 頁)。

このように「歴史すること」とは、私たちの生きる時間がどのようなものなのか、過去を掴もうとし

ながら、構築しなおすことである。そこで注目されるのは、歴史学の「外」で営まれる歴史に関心を寄せてきたエスノヒストリアンたちの議論である。彼らは「歴史すること」を歴史家の専売特許から解放し、人間の日常生活における「歴史すること」の遍在を見出してきた。ここでは南太平洋を主なフィールドとしたグレッグ・デニングの議論に注目してみよう。

歴史 (histories) とは過去のメタファーである。歴史は一群の出来事を一群のシンボルに翻訳する。しかし歴史は現在のメトニミーでもある。……現在は社会的現実であり、私たちの生き方の構造でもある。それは共有されている形式にコード化された過去の表象を通じて存在している。(Denning、1996、37～8 頁)。

デニングは「歴史とは生き方の構造を作ったり、変質させたり (unmake) する『美的な人間の営み (sensuous human activity)』なのである」(Denning、1996、38 頁) と「歴史すること」の定義を最大限拡張しようとしている。どの時代においてもどこにおいても人間は現在と過去をともに掴むために「歴史する」。ただそのやり方や卓越さの規準が、時と場合によって、そしてひとつの社会と見なされている中においても異なる。このようなデニングの議論を理論的な支柱のひとつとして保莉実は、この「歴史すること」を歴史実践と呼び、「歴史実践は、他のさまざまな日常の実践と併存し同時進行しているのが常態」(保莉、2004、20 頁) なのだとする。本稿においてはデニングと保莉に倣い、歴史実践を、過去を用いて現在を作ったり、変質させたりする人間の営みというように理解する。

(2) 「批判的活性化研究」との接点

農山村の「疲弊」あるいは「荒廃」が言われて久しい。こういった事情は、傾斜地が多いという地理的条件や社会インフラの不十分な整備が、生産活動や生活にとって不利に働きがちで、いわゆる中山間地域においてより深刻であると言われる。民俗学者の山下裕作は苛立ちを隠さずに、多くの中山間地域の住民は、集落の行く末についての暗い見通しとともに生活を営まざるをえないことを指摘する。

初めての現地へ調査に赴くたび、生活者からいわれる言葉がある。「この村は過疎の村だから、何

をしても無駄だ」「ここいらは限界集落だから、もうすぐなくなる」。何故、現実の生活者である老人の口から「限界集落」などという言葉が出るのであろうか。何故、地域に根を張って暮らしている生活者が、かような諦念を抱かなければならないのか(山下、2008、70頁)。

本稿の文脈においてはこの「諦念」の構成のあり方にまずは注目することが重要だ。「諦念」とはひとつの「現在」のあり方に支えられている。「もうすぐなくなる」という将来の方向を変えることはできず、したがって「何をしても無駄だ」とされる「現在」である。これを「方向づけられた現在」とここでは呼びたい。

山下は人々に「諦念」を生み出す大きな要因として活性化政策を指摘する。なぜなら住民は自身と「成功例」との差異を優劣として自覚させられ、これに追いつくように促される結果、挫折を余儀なくされるからである(山下、2008、68～9頁)。無論、多くの研究者の目が「どうすれば集落が活性化、あるいは再生できるのか」という関心に直行するのも理解できる。活性化や再生(あるいは今日ではここに「戦略的撤退」を含めることもできるだろう)の意味するところはさまざまではあるが、近代化モデルや開発主義とは一線を画し、地域の「自立」や「内発性」を強調するオルタナティブな発展モデルがこれまで盛んに探求、提唱されてきた(保母、1996など)。

これに対し原山浩介は、ある地域や集落の実践が「優良事例」や「成功例」のモデルとして構築され称揚される際に、活性化研究にとって都合のよい側面のみが切り取られる危険を指摘する。そして、そこに「自主性」と「自己責任」をセットにして地域に押し付けようとする現代の権力構造を見ている(原山、2009)。

原山の指摘する権力構造について中田英樹は、人々の実践を一貫した意味のあるもの、すなわち活性化に向けられているものとして、おしなべて回収して語ろうとする活性化研究の「猛烈な回収力」(中田、2001、8頁)の存在を指摘する。さらに、「外部」の眼差しを「内面」化しながら、活動する主体として住民が自己を成型していくという過程に、活性化研究自身も関与していることにあまりに無自覚であること、あるいはそれを隠蔽していることを厳しく指弾する。

そこで中田は、社会構造の変動や支配的な言説との葛藤に満ちた関係の中で「『発展』へ向かう『われ

われ』として住民が凝集する」(中田、2001、11頁)プロセスとその中に現れる「揺らぎ」を読み取ることを課題とせよという。筆者の言葉で言い換えれば、「活性化」や「再生」とは、前提としてすでに存在するとされる地域を発展させるプロセスではない。むしろそれらは発展させるべき「地域」が構築されていく、そしてしばしばその結果は「地域」の流産となるプロセスである。そのプロセスの中にさまざまな生き方の可能性が十分に展開されないままに、あるいは語られないままに閉じ込められているかもしれない。あるいはその可能性を挫折させ、「諦念」をもたらしかねない蹟きの石が当事者にも研究者にも十分に認識されていないまま存在しているかもしれない。

本稿では原山や中田のように既存の活性化研究を批判的に検討しながら、知と実践の関係を再編していこうとする志向を持つ研究を「批判的活性化研究」と呼ぶ。その意義は、これまでの知のあり方を見直ししながら、「活性化」と一言で括られてしまうプロセスの中にさまざまな力の働きやノイズを発見していこうという方向性を打ち出したことにある。

本稿ではこの「批判的活性化研究」の理論的な呼びかけに、事例研究を通して課題をより具体化することで応じたい。本稿で取り上げるのは一見すれば集落の「活性化」に取り組んでいる男性である。しかし観察されるのは「地域の発展」とは異なる歴史の語られ方であり、そしてそれに基づいて「地域」を凝集させようとする彼の試みが立ち往生してしまう様子である。

3. 調査地および調査の概要

(1) X集落の概況

X集落がある神奈川県西部に位置するZ町は、町域が平野部と丘陵部にはっきりと区分されているのが特徴である。平野部には東京都内まで電車で1時間半から2時間程度の通勤圏として住宅街が広がる。一方、丘陵部においては集落が点在し、周辺の都市部に通勤する兼業農家が多く、人口減少と高齢化が進んでいる。X集落は四方を300m程度の丘陵に囲まれた盆地に存在する。集落住民の言うところの「すり鉢」の「底」にあたる部分に人家が集まる。斜面には耕地や利用されなくなって荒廃した薪炭林が広がる。2012年の段階では76世帯206人で構成される集落で、高齢化率は25%を超える。

60年代までは麦畑やタバコ畑、利用され整備された薪炭林、牛の1頭飼ひ、茅葺き屋根によって「純農村」の景観を維持していたX集落も、やがてその姿を一変させた。保有する耕地面積が0.5から1.0haの世帯が最も多く、小さな傾斜地において野菜やイモ類か、「手のかからない」クリやサクラなどを栽培するより他はない現状では、農家が専業として成立する条件はまず整っていないと言ってよい。薪炭林の利用がなされなくなり、いわゆる里山の荒廃が始まった。同時に耕作放棄地の広がりとその藪化・森林化も無視できない規模になった。どちらも住民たちには「ジャングル化」と呼ばれ、景観を台無しにするだけでなく、隣接する畑での生産活動や、日照を大きく遮ったり居住エリアにも藪が侵入したりすることによって生活環境も脅かしているとされる。さらに荒れた土地に投棄される産業廃棄物も多い。これらは単に経済的、社会的な問題として捉えられているばかりではない。この「ジャングル化」に歯止めはもうかからないだろうと述べる人物にとっても、やはりこの状態は「気持ち悪い」、「みっともない」ものだと意味づけられる。

(2) 調査対象者の選択理由

このような状況に対して、2005年からハイカー向けの公園の整備や菜の花畑の耕作、薪炭林の再生に取り組む活動「X集落の将来を考える会」（以下、考える会）が集落の住民有志で開始された。集落の多くの世帯と若干の集落外の人間を会員として抱える団体ではあるが、毎月2、3回の清掃や山林の整備活動に参加するのは十数名前後と活動の広がりには苦戦している。本稿が主に検討の対象とするA氏は、2004年よりこの団体の発足に中心的な役割を果たしてきた1944年生まれの男性である。

本稿が主に依拠するのは2009年から2011年にかけて行ったA氏へのインタビューデータである。筆者はX集落の調査を行うため「考える会」にコンタクトを取った。その窓口となったのがA氏だった。筆者はA氏との会話を続けるうちに、彼の思考と実践の考察はX集落の現状の理解に欠かせないものであるとの認識と敬意を深めていった。というのは、A氏はX集落に「反状況的」に関わろうという態度を強く持つだけに、一層、集落の社会的状況に深く貫かれているのを見出したからである。本稿で以下論じていく内容はX集落とA氏という特殊な事例に依っている。けれどもX集落の抱える耕作放棄、里山の荒廃、空き家の発生といった課題は一般的

ものである。また「考える会」の活動も極端な「成功例」でも「失敗例」でもなく、その主導的人物であるA氏の難題を検討することは、同様な活動の抱える難題の一端を観察することになるだろう。なお、以下の記述における全ての人名・地名は匿名・仮名であり、インフォーマントの個別情報や口調も論旨に影響しない限りにおいて改変してある。また、X集落についていくつかの文献や論文を参照しているが、調査地の特定に繋がるものは書誌に掲げていないこともお断りしておく。

4. 「方向づけられた現在」の典型的な証言

筆者は、1990年代後半に自身の小学生の子に「集落の人口・世帯調査」を夏休みの自由研究として行わせたことのあるインフォーマントに出会った。「何かこのままではおかしくなっちゃうんじゃないかって思って、子どもそっちのけで資料集めに熱中しました」と彼女は語った。そのときに彼女が集めた、行政の報告書や新聞記事、郷土史・民俗学関係の雑誌の切り抜きなどは今も丁寧にファイルされている。それから十余年、「おかしくなっちゃう」ということの内実は、ほぼはっきりとするようになった。集落の変化がどのように語られるのかについて、もっとも典型的な証言を挙げてみよう。「でも何か対策があれば、流れが変わるということはないですかね?」との筆者の質問に、ある男性インフォーマントは、こう答えた。

どうだろう。うーん、集落がさ、完全になくなっちゃうことはないのかもしれないけど、どんどん小さくなって、人が住めない土地になっちゃうって思うねえ。そこまで一気にさ、極端に、いくつかはわからないけど、もうね、そういう風に近づいていくってのはあるんじゃないかな。うん、いろいろどうにかしようとかあったよ。ねえ、みかんやってみたりしたってのもそうなんだろうしさあ、あとそれから、あれだって開発だなんて期待があったけど、ああ、期待ってほどでもないけど、なんかあるかって思ったりもしたけどねえ、どうでしょう。だめだよ。だから、きついんじゃないかね。

「方向づけられた現在」の典型的な語り方である。どの程度「人が住めない土地」になるのかは不透明だが、その方向に集落が向かっているという認識は、

はっきりと証言されている。ここでは人口推計を用いて実際のところはどうかと考えるのではなく、この認識を支える根拠を考えてみよう。証言の後半で、かつて「いろいろどうにかしよう」とされた出来事があったことが語られている。

「みかん」というのは1961年からの農業構造改善事業によってZ町で進められた、作付けのミカンへの転換のことを指している。これはX集落にとって農業開発の見込みを失わせる結果となった出来事だった。当時、農業センサスによれば、70年代に入るまでにX集落を含む地区でも農家の約90%がミカンを導入した。X集落もこの頃「一面がミカン畑」だったと言われる。農政の「選択的拡大」路線に乗った形である。「畜産3倍・果樹2倍」という、当時のうたい文句に示されているように、戦後の経済成長による食生活の変化に伴う需要増大には期待が寄せられていた。ところがミカンの実がなる頃には、ミカンの価格は供給過剰により暴落していた。九州などの大産地と太刀打ちする力もなかった。さらにオレンジの自由化によって、X集落のミカン栽培は大打撃を受けた。今では集落を歩くと、収穫されずにミカンの実をつけたままの樹に出くわすことも多い。

もうひとつ、「あれ」というのは、ここ十数年、話が出ては立ち消えたり、縮小されたりしているZ町の開発計画のことである。この開発計画はX集落を含む丘陵部の地区を対象に、人口増加を目指すべく住宅造成や農作物の販売所、観光宿泊施設を整備していくというものであった。その中でX集落には農用地の指定のあり方を見直すという試案が、90年代に行政から提示されていた。農用地の転用は厳しく制限される。その縛りを少しでも緩くし、宅地を含む何らかのこれまでとは違う土地利用の可能性を広げることで、現状の打開につながるのではないかという期待もあった。ところがその計画は徐々に縮小されていく。丘陵部の他の集落で大規模に行われるはずであった宅地造成は中止となった。また、農作物の販路の確保として期待をされていた観光宿泊施設は、再三の計画変更の後、観光客が見込めるかどうか不透明なまま施設の建設のみが始まった。それに先駆けて作られた森林公園は、行政が維持管理費用のすべてをもちや負担できないということから、ボランティアによる維持整備を呼びかけながら、なんとか維持されている。

どちらも当初は期待されたものの、どちらもその期待が裏切られた過去である。期待が裏切り続けら

れたという歴史が「方向づけられた現在」を支えている。頓挫しつつある「開発計画」は比較的近過去に属す。一方、「みかん」の失敗は、現状を導いた遠因として、そして失敗する計画の先駆けとして思い出されるものである。

上記に加えて、もうひとつ「方向づけられた現在」を支えるのが「取り戻せない昔」という認識である。このとき現在は過去から断絶したものとされ、現在は過去とはまったく異なる社会として語られる。そして現在は未来に向けてさらに異なったものとなっていくとされる。たとえば同一の男性の証言を続けてみよう。先の証言の後、筆者は「どういうことがあれば、今の状態に変化が見られると思いますか?」と訊ねてみた。

生活が便利になっちゃったからな。豊かになった、便利になったというんで、その引き換えで、農家やめて人が減っちゃったし、山も荒れ放題。いや、ほんとよくないとは思うよ、だけどねえ、そういうのに戻るっていうわけにはいかないでしょ。昔は昔の暮らしがあって、今はね、別のものだし、それからまた別のものになっていくんだろしねえ。どうにかしようっていうのもあるけど、変わっちゃったものは仕方ないよ。

誰に訊いたとしても60年代が断絶線とされる。経済成長の波がX集落におよんだことでライフスタイルが大きく変わった。結果、X集落は「豊か」で「便利」な生活をおくれるようになったけれども、その代償が露わになってきている。けれども昔に戻ることはできないから、この趨勢は変わらないし、手の出しようがないだろうと語られる。

以上のように「方向づけられた現在」は2つの過去への視線によって支えられている。ひとつは「現状の打開」への期待はもう持てないということ、そしてもう昔には戻れないということである。これに抵抗し、別の現在を対置しようとするれば単なる発想の転換のようなものでは済まないだろう。

5. A氏の歴史実践

——「祖先たちの力」を想起すること

(1) 活動の発端

A氏はX集落で育ち、大学卒業後、横浜近辺の土木関係の企業に通勤していた人物である。退職後の

現在は自家消費用の野菜を育てながら、妻と2人暮らしをする、いわゆる「定年帰農者」である。大学進学をしたA氏は「頭のいい人」と呼ばれる少数のグループに分類されるが、それでもX集落において、Z町外での就労からの帰農というライフコースはA氏の世代の男性にとっては一般的である。彼らは自身が通勤していた時期を、集落から「離れていた」とか集落に「いなかった」としばしば表現する。

A氏の2人の娘はともに結婚し、都内で生活を送っている。2004年に彼が「X集落の将来を考える会」の結成を呼びかけたのは、下の娘が結婚で集落から転出したのが直接のきっかけだった。当初A氏は娘夫婦がX集落で同居してくれるものだと思っていたのだった。「ふとね、思ったんです。あれ、このままだとどうなるんだろうかって。なんか娘も帰ってこないだろうし、どうなっちゃうんだろうって」。すぐさま彼は集落の世帯がどうなっているのか調べた。そして半数近くの世帯が次の世代の後継者を確保していないという結論に達した。「徐々に住めないとこに、ここはなってきたんです。空き家も増えてくるし、住んでる人も周りに人がいないんじゃない、怖いだろうし、草ぼうぼう生え放題の場所になっちゃう」とA氏は語った。「ほくよりも家内の方が長く生きるでしょ。何年後かもしれないし、今すぐかもしれないんだけど、そんなところに残せないと思っています」

2004年からA氏は3名の人物とともに、何をすべきなのかという議論を開始した。そのうち2名はX集落の住民、もう1名は集落内で養蜂業を営む人物だった。その約1年後、「考える会」が発足、理事長は集落内の戦前の大地主である「名家」出身の人物に任せた。普段、集落内の「階層」が話題に上がることは稀だが、こういった新しい運動や企画を開始する場合にはその威信が用いられる。理事長の下、A氏は事務局長として活動を展開するようになった。A氏が起草したその設立趣意書には次のようにある。

中山間地の里山の荒廃した環境を「人の和」と「共同の精神」で再び、住む人に優しく、この地を訪れる人に安らぎを与える『ふるさとづくり』を目指して、『環境の保全』を中心に実践活動、行政への提言、環境に関する調査研究、環境問題に関する普及啓発活動を行う。

議論を通してA氏が辿りついたのは彼の言う「負

の連鎖」理論であった。A氏によれば、X集落の居住環境は劣化の一途をたどっている。その劣化が更なる転出を生んでいる。したがってまずは生態環境や田園風景の復元を行い、住みやすい集落にし、今は集落外で生活を営んでいる人も帰ってきやすいようにすべきである。戦後の経済成長に伴う集落の変容の負のコストが現われ、それが拡大再生産されているのを生活環境の整備によって断ち切ろうという理論である。A氏はこのとき、この「負の連鎖」を断ち切るに際しての最大の障害は、「人の和」や「共同の精神」が集落から失われてしまったことだと考えたという。

このような問題意識からA氏は「考える会」への参加を呼び掛ける。そこにはこの会を通して「共同の精神」を復活させ、「負の連鎖」を断ち切るという期待があった。ところがその期待は外れてしまった。じっさいに活動に参加する人間は、毎回入れ替わりがあるものの、十数名程度にとどまったのだった。そのほとんどは定年帰農者の男性であった。彼らは荒れた里山や放棄地の復元という理念に賛同する者の他、農業の情報交換の場を得ようとする者、ボランティア活動に関心のある者などであり、さまざまな動機で参加していた。A氏は活動が集落全体規模に広がっていないことに不満を漏らした。

みんな忙しくてやってられないって言うんです。だけど、その後ろにあるのは、山が荒れるのは仕方がないとか、限界集落になってしまうのは仕方がないとか、そういう風な考えなんですね。冗談じゃないって言ってやりたいんです。これをどうにかしなくてはいけないってのが、うん、そう、ずっとあります。

A氏がぶつかったと考えるのは、「方向づけられた現在」であった。しかし「考える会」発足直後の時点ではやれることも限られていた。まずは活動を淡々と続けるより他はないように思えたという。

活動を始めて2年後の2007年、集落の旧家の物置から戦時中の写真が発見されたことがA氏の第2の転機となった。それはA氏を過去へと向かわせるきっかけとなった。まるで啓示のような出来事だったように彼は語る。筆者と話をしていたあるとき、彼は折りたたまれ、しわのよった紙を大事そうに取り出してきた。その丁寧な扱いはその紙の重要性を十分に示していた。

その紙は1944年に陸軍が本土防衛のための軍事

拠点をX集落に作ろうとして撮った航空写真を大きく引き伸ばしたものだ。その写真はX集落の旧家に駐屯していた部隊が敗戦後に残していったものである。そこには戦中のX集落の畑や林がはっきりと写っていた。A氏によるとこの写真の発見はまさに衝撃的だったのだという。彼は次のようなメッセージを写真に読み取った。

自分の祖先たちは鋤1本、鎌1本でこんなに綺麗に畑を作っていたんだなあ、とね。見てください。この麦畑に林の綺麗さ。少しも荒れていないんですよ。大変なことだったと思いますよ。だけど祖先はね、そういうことができたんです。そういう力がこの人たちにはあったんです。自分の親父も病弱だったんだけど、鋤1本もってずっとみんなで力を合わせて守り続けていたんだと思うと、これは衝撃的ですよ。祖先たちより自分たちの方が道具なんて恵まれているはずなのに、今は荒れ果てて……ほくらにもできないはずがないんです。

1943年から麦の増産が始まったから、この写真は戦時中の食糧増産体制のむしろイレギュラーな風景だと考えることもできる。しかしA氏にとってはこの写真と「考える会」とのつながりは明かだった。この写真は単に「祖先たち」への畏敬の念を呼び起こすことにとどまるものではなかった。それはまず、A氏に「祖先たち」のしていたことは自分たちにもできるのではないか、彼らの力は自分たちの中にも眠っているのではないかという認識をもたらしたのだという。「祖先たちの力」の根本は、力を合わせるということにある。自分たちはその力をもってすれば、再び「力を合わせて」困難に打ち克てるのではないかという期待が発掘されたのである。

この写真との出会いを通してA氏は、それまで自分が軽視していた物たちに「祖先たちの力」の刻印や痕跡を見出すことになったと語る。例えば写真にかんする証言でも言及されていた鋤がある。彼の父親が使っていた鋤である。彼はそれを納屋に大切に束ねて保存している。「見てください。刃がね、磨り減ってるでしょう？ 毎日毎日働いているうちに磨り減ったものです。親父は、これがこんなになるまで畑を手入れしていたんだなあって思うと、もうこれを捨てられなくなっちゃいました」。鋤の磨り減った刃は、彼の父親が行っていた、たとえば道具が貧しくても集落の力を合わせて土地をきれいにしていた

という過去を指し示す。鋤はそのような「祖先たちの力」の証拠である。それをA氏は捨てることなどとてもできないのである。他にも彼は自宅の井戸を大切に保存している。井戸も「祖先が力を合わせて掘った」痕跡に他ならない。

写真の発見は、A氏に過去へと向かうひとつの態度を形成する契機となった。それは過去を探索し、「祖先たち」がどのように力を合わせて困難を克服したのかを見ることによって、自分たちに眠る力を思い出そうという態度である。ここに彼の「方向づけられた現在」とは異なる現在を作りだす歴史実践の可能性が開かれる。A氏はこれをもうひとつの衝撃的な出来事を語ることによって、比喩的に筆者に説明した。それは「考える会」の活動の一環としてX集落の神社の森をその管理を行っている人物を手伝う形で整備したときの思い出である。

あの神社の森は長い間、誰も手を出さずに荒れ放題になっていたんですね。もうジャングルみたいでした。もうはじめは誰も近づけないみたい。それでね、徐々に、下をきれいにしたり、木を切ったりしたらですね、すごい巨木群が現われたんですよ、椎の木。あれ、潜在自然植生っていうんだそうですね。原始からあるものなんだそうです。一番古い層がですね、取り戻されたっていうか、あの巨木群の中に入るとおごそかな、謙虚な気持ちになりますね。ああいうのがずっと眠っていたんだなあと思って。古い層っていうのを起こすっていうのかな、そんな感じで、やっていかなくちゃいけないと思うんです。

A氏にとって「力を合わせる」というのは新たに始めることなのではない。そうではなくて、自分たちに「古い層」として眠る力をあくまで「起こす」ということなのである。A氏にとって過去は過ぎ去ってしまったものではなく、現在に潜伏し、眠っているものである。まぎれもなくそれは「方向づけられた現在」に対して、過去の喚起する力を用いて抵抗しようとする態度につながる。このとき現在は「祖先たちの力」の潜在を予感させる現在となり得る。「昔は昔で、今となってはどうしようもない」という認識に対抗する態度であると言えよう。この「祖先たちの力」の性質をより見きわめ、どのようにそれを起こすのか、どのように集落の人々に思い出してもらうのかというのが、A氏の取り組むべき課題となった。

(2) 過去の研究へ

2009年よりA氏は通常の「考える会」の活動に加えて、X集落の過去の研究を本格的に開始した。具体的には、X集落の「先人たちが地域を守るために何をしてきたのか」という調査とその成果を「考える会」の会報で連載することを始めたのである。A氏は「考える会」の会報を月に1度のペースで自宅のPCで製作、発行し、各戸に投函している。ここではA4版2ページのうち、「考える会」の活動内容の広報に半分を割り、残りの半分は「X集落の生活を豊かにするため、先祖は何をしたか」という歴史のコーナーに普段はあてられている。ときには会報のほとんどを過去にかんする記述が占めることすらあった。このコーナーの意図について会報でA氏は次のように書いている。

無論、自分の生活を守る事は重要な事です。しかしそれだけではダメです、10のうち9は自分の仕事をし、1は地域の仕事をする必要があります。かつて、この地域の先人達は、地域の暮らしを良くするため、暮らしやすくするため、共同の精神で、トンネルを掘り、道路を作り、屋根を葺き、皆で協力しながらこの地域を守ってきました。今、この先人の精神を思い出し、実行しなければ、この地域は「荒廃の道を進む」ことになります（強調は筆者による）。

A氏が過去に向かうのは「先人の精神を思い出し、実行」するためである。A氏は読者に、あるいは聴衆としての会員に、過去のイメージを借りて「祖先たちの力」を思い出すように呼びかけている。このコーナーでA氏が最大の関心を寄せていたのは、X集落で1951年から1955年にかけてなされ、Z町の中心部へのアクセスを飛躍的に高めたトンネルの開削事業である。このトンネルによってバスが開通し、子どもたちがX集落の分校ではなく中心部の学校に通えるようになり、そして通勤者の増加が起こったのだ。この事業では、トンネルの開削作業自体は専門業者が行ったものの、坑口までの道路整備はすべてX集落からの出役によってなされた。この事業をA氏は「地域を『血と汗』で築いてきた偉業」と呼ぶ。そして、この事業の集落側の代表であった人物の息子から当時の史料を借りたり、町の図書館にある60年代に行われた社会学的調査の報告書を

用いたりして記述していく。

A氏は「かつて、地域の道路を良くし、生活を少しでも良くするために、先祖の人々は皆で話し合い、地域の役員の大変な指導力の下で、道路を自らの手で作ってきた」と述べ、新潟県山古志村での隧道工事では村人が16年かけてのべ3000人から5000人が工事に加わった、と紹介しつつ、次のように強調する。

（山古志村の）偉業も何とか生活を良くしたいと願った、住民の執念と言わざるを得ない……しかしX集落の工事はたった1年間で3700人の労役を出したのである。単純計算では各戸で60日の労役を出したのである、実に驚くべき事である。それ程にこの地域を何とかしようとした先人の熱意に他ならないのです。

先人たちは山を掘りぬくという大きな困難を克服するために「共同の精神」を発揮した。ならば、そこにもう一度立ち戻り、「共同の精神」を思い起こすことはできないのかという問題意識がこのテキストには表われている。A氏は歴史実践を通して「考える会」の位置づけもより明確になったのだという。A氏曰く、彼にとって現在の会の姿は本当の姿ではない。彼は筆者に「考える会」の今後について次のように語った。

今みたいに、里山をやっているのは、ひとつのきっかけとか実験みたいなもんなんですね。ゆくゆくは、みんなで力を合わせて、いろんなことをね、やっていけるような、たとえば村の老人の買物を手伝ったり、野菜はあるからね、車を出してあげてお肉をまとめて買ってきてあげたり、家の掃除を手伝ってあげたりね、力を合わせてやっていけるんだみたいなものを、今は活動に参加していない人にも見せていきたいんだよ。これだけ山をきれいにできるってことはもっとできるぞ、力を合わせればっていうのをね。

さらに彼は会報でも次のように述べている。

少子高齢化が進んでいます、個々人ではなく皆でこの地域を守って行く仕組み作りを、今始めないとこの地域は大変なことになります。「X集落の将来を考える会」は試行錯誤ではありますが、この仕組みづくりをしようとしています。

A氏にとって「考える会」は、祖先たちが持ち、自らも持っているはずの「共同の精神」を孵化させ、実現し、集落の住民たちに見せ、思い出させるための、いわば「祖先たちの力」の孵化器とも呼ぶべき仕組みとして位置づけなおされた。A氏は「考える会」の活動の最中においても、特有の歴史実践を行っている。活動でなされていることに「祖先たちの力」の痕跡や徴をやはり読み取ろうとするのである。ある荒廃林の整備を「考える会」で行おうとしたときのことである。その林はまさに「ジャングル」状態で、倒木の上に倒木が積み重なり、さらに不法投棄が大量になされ、人力ではいつ作業が終わるか目途もつかない状態であった。そのとき会員のひとりが、重機を持ちだし、人力では動かしようのない木やゴミを次々と片付けていったのである。筆者を含めた会員たちは、ただ皆それを眺めるだけであった。ある会員が評したように、まさに「圧倒的で立ち尽くしてしまうな」と言わざるを得ないほどの機械の力が見せつけられたのであった。だれもがこの活動日に受けた印象を「やっぱり重機がなくてはだめだな」、「人間の力じゃどうにもならんな」と口々に言い合っていた。ところがA氏だけはこの活動の後、筆者に、「やっぱりみんなの力というのはすごいです。はじめは無理というか、1人じゃやろうとも思わないことができてしまうっていうのがわかりますよね」と述べた。彼だけが力点を重機ではなく「みんなの力」に置いた語りをしたのであった。これに対して筆者が「機械はすごいですよね」と言うと、A氏は「たしかにそうなんだけど、機械が入れるまで入口を作ったのは人間です。そういう力を大事にしたいんですね」と断言した。会員のほとんどが人間を圧倒する機械の力を見たところに、彼は機械を招き入れる道を作り出した人間の力の方を見ていた。どのように「祖先たちの力」が現われるのかを注視する態度である。

このようにA氏は過去のイメージを用いて「方向づけられた現在」に対抗しようとする。一言でA氏の歴史実践を要約するならば、過去を思い出すことが、忘れられている「祖先たちの力」を含んだ現在を思い出すような思い出し方の実践である。ところが、これは集落の人々はおろか「考える会」の会員にも必ずしも説得力のあるものとして受け取られていない。次章では彼の歴史実践の問題点を露わにしよう。そのような出来事を検討する。これはA氏を論難したい

からではなく、そのような出来事たちが、X集落で「歴史すること」が持つ困難を明らかにするからである。

6. A氏の歴史実践に対する住民の反発

その困難とは、A氏はなぜ集落の現状を特権的に批判できる立場にいられるのかという厳しい問いかけの存在によって明らかになる。先にも述べたようにA氏は「祖先たちの力」を人々が忘れてしまった時期を1960年代に求めている。そして2000年代になってX集落の抱える課題が顕在化したにもかかわらず、その力を思い出そうとしない人々を批判していたのだった。

しかしいくつかの断片的な会話や証言によって浮かび上がってくるのは、このA氏の立場を構築し、それを支えているのは、じつは彼が探査する過去だけではなく、彼が沈黙している過去でもあるのではないかという疑問の存在である。A氏の歴史の語りには戦前、戦後直後の出来事からの予感が豊富にある。そして否定的な評価ではあるが90年代の終わりから2000年代までの近過去についても多くが語られる。その一方で、彼自身が会社勤めをし、まさにその「時代の担い手」となった60年代の後半から80年代にかけての位置づけが圧倒的に不透明なのである。

このことを示すために、A氏が「考える会」の広報のために参加したZ町の環境展に彼の高校の同級生でありZ町の町会議員でもあるP氏が現われたときの会話を見てみよう。P氏はX集落出身ではない。

P: いい活動だと思うよ。やっぱりXは荒れているからね。

A: そうなんだよ。やっぱりねえ、ほんとおかしくなっちゃってね。みんな働きに出ちゃって村のこと考えなくなっちゃったし。今じゃ、村のことなんかどうでもいいって人もいる感じだしね。

P: どうしてそんなになっちゃったのかねえ?

A: やっぱり昭和の30年代の後ろあたりからだよね。生活も便利になっちゃってさ、いい教育受けてっから、勤めに出てさ。おかしくなっちゃったんだよ。村のことほっぽりだして。

P: でもそれってXの人も望んだんじゃないの? 働きに出たわけでしょ、それでいい暮らしができるようになったんじゃない。望んでなった結果とも言えるんじゃないの?

A:それはね……うーん、やっぱりおかしいんだよ。
 やっぱねえ、うーん、それはそうなのかもしれないけど……いや、やっぱり、おかしくなったんだよ。

会話はここで更なる来客によって途切れたため、A氏はそれに救われた形になったと言えるかもしれない。A氏の批判はまさに彼自身に差し向けられてしかるべきものであった。集落がおかしくなったとしてA氏が指摘する「昭和30年代の後ろ」、すなわち1960年代以降、まさに彼は大学を出て、職場に勤め始めた。農家の仕事は休日に両親をまれに手伝うだけであった。この点をP氏は気軽な調子であるが、鋭く突いている。A氏こそが自身の問題視するX集落の荒廃の原因その人であったのではないか。その彼がまさに自身が生きた時代をどのように評価し、位置づけるのか。この点こそA氏の歴史実践が座礁してしまいかねない躓きの石に他ならない。

もうひとつ事例を挙げてみよう。X集落は2001年から、中山間地域等直接支払制度の適用を受けてきた。X集落では交付期間中は一定の面積の耕作地を維持することを集落協定として締結していたことになるが、2009年にこの協定を延長しないことを決めた。加齢によって、分担された耕地面積を維持できない世帯が次々と現われ、集落のこの制度担当役員たちが中心となって耕作を肩代わりせざるを得ないという状況が生まれたからである。自身も高齢化しつつあったり、別の仕事を持ったりしている役員たちにとっては大きな負担であった。そもそも広い耕地を維持したとしても、そこから大きな収益があるわけではない。大規模化を進めようという農家もない。すでに指定された耕地の多くが、ただ草を刈って見た目だけを維持するだけの利用なき管理の対象になっているに過ぎなかった。集落住民が集まった場で制度の延長の可否を役員が問うたとき、延長を主張する者はきわめて少なかったのだという。

ところがこの決定にA氏は激怒した。彼は「その場では何が何でも話し合われないうちに決められてしまった」と主張した。そして集会の数日後にたまたま会った同世代の担当役員に「そんな決定するなんて馬鹿だって言ってるんだ」と厳しい言葉を直接投げかけた。その上、「考える会」の会報に次のように書いたのだった。

他の集落を廻ってみても、Xほど荒廃地が多く目に付くところは無いように思います。……ところ

が、もう耕作地を管理できなくなってきたという声が多く、Xはこれらの補助を受けない事になりました。これは、「地域を守る」ことからすると大きく後退したことになります。非常に残念です。

この文章を読んだA氏と同世代の「考える会」男性会員は困惑しながら、丁寧に言葉を選びつつ筆者に以下のように語った。

いやあ、言いたいことはわかるんだけど、(農地を維持していくのは)つらいから……。じっさい畑をやるのは役員だしな。……人の畑をやってきたのは役員だし……。働きに出ても役員の人はずっとやってきたしなあ……。いや、誰が悪いってんじゃなくて、みんな悪いってことじゃないのかな、って思うけどなあ……。だって、農家をみんなでやめちゃったわけだしなあ……。

ここでもA氏の位置取りの問題点が突かれている。それはA氏も「農家をみんなでやめちゃった」1人に他ならないという点である。だから今回の結果は、「みんな悪い」と言えるはずなのに、どうして頭ごなしにその批判が可能なのかという困惑が語られる。

「農業を営む女性」からもA氏の歴史実践は批判されることがある。ある女性は、はっきりと「考える会」とは方向性が違いますと筆者に述べた。1960年生まれの彼女は1度X集落から転出したが、結婚の後、家を継ぐために戻ってきた。それ以来20年以上農業を営んでいる。

(「考える会」の活動は) いいことだとは思います。山がきれいになりますし。しかしね、あの人たち、いなかったじゃないですか。山とか畑が荒れていくときに。そのとき何をしていたというんですかって思ったりもするんですよ。それを今になって帰ってきて、おかしいと言われても、なら自分たちはどうなんですか。今更、非難されますけど、そういうことじゃないと思うんですよ。私は私なりにがんばってますし、がんばってきましたし、なんかそういうのってちょっとね、わかるでしょ？

サラリーマンの夫を持つ彼女には、X集落の耕地を彼女の「出来る範囲」で維持してきたという自負がある。ここでも名指しこそされないものの、自身

の生活史を歴史実践から排除している A 氏への批判を見ることは容易い。

以上の証言が示唆するのは、「自身を『無罪放免』してはいないか」という疑義に他ならない。あたかも自分とは関係ないような力が働いたものとして経済成長の影響が集落に波及していった時期を語けれども、あなたもそれに積極的に参画していたのではなかったか。力を合わせるということを言うが、それを破壊したのはあなたでもあったのではないか。これらの疑問は、一刀両断に集落の人々を批判する A 氏の特権的な歴史実践に向けられている。

もしこういった声に A 氏が正面から応答しようとすれば難問を彼は抱えることになる。今から先行すること数十年の期間を、自身も参画していた時期として捉えた歴史実践は果たして可能なのか。自身のこれまでの生き方を批判的に振り返り、新たに「現在」を構築していく営みはまったく容易ではないだろう。しかし同時にこれは自身の歴史実践を他者の過去と接続し開いていく契機ともなり得る。であるとすれば注目されるのは「考える会」内部で A 氏の言説がどのように受け取られているかという点である。

先の女性の証言で「あの人たち」とひとまとめに語られている「考える会」の会員でさえも、積極的に A 氏の言説に応答しているとは言い難い。A 氏は会報を書き上げると活動日に集まった会員たちの前で読み上げるのを常としていた。彼の話が終わるといつも会員たちは会報の内容に触れることはなく、話題はその日の作業の段取りに移っていった。

A 氏の歴史実践は、ここ数十年の過去のすべてを否定しかねない。このとき彼の歴史実践は暴力的にすらなり得る。たとえば A 氏は次のように書く。

先人達は、この地を生命の根源である水源の里として、豊かな実りの場として、自然と折り合う技や知恵を蓄えながら、無数のいのちを育み、美しい故郷の山河を必死に守り続けてきました。昭和30年代の産業構造の変化は、確かに豊かさをもたらしたかもしれませんが、故郷を慈しむ心をなくしてしまったような気がしてなりません。

こういった会報の記事を読み上げる際に A 氏は「家を守ってこの地で住まうのが普通のこと」であるとか、「ちゃんと結婚して子どもを生むっていうのが正しいことなんです」と力説することも多々あった。会員たちはじっと黙り、それを聴いていた。このと

き A 氏の言説は聴衆を指弾していることになる。聴衆の中には、独居の高齢者もいれば、独身の男性もいる。A 氏を含めて後継者のいない人もいる。「自分たちは間違っていると言われているみたい」と筆者にこっそり明かした会員もいた。

自身の歴史の語り口が必ずしも他者に開かれているものではないということは A 氏も認識しているところではある。彼は「なんかこう、なんだこの野郎っていう言い方になっちゃうことがあるなあ。いろんな考えとかね、立場があって、そういうのも聴かないと」と筆者に語ったことがある。この嘆息の続きにおいても過去が呼び出されることは興味深い。

僕なんかと違ってさ、昔の人はさ、こんな狭いところだから仲の悪い人でもなんとか一緒にやってくってことを考えていたんだよね。……土地の境で揉めたときはさ……文句をつけた方の人の土地を測るんだよ。よっぽどちゃんと考えてからじゃないと、文句を言いださないようにしたし、言うからには、しっかりするっていう仕組みだよ。いやあ、こういう精神と言うか憲法と言うか、大事だよなって思うんですね。

今の A 氏は、開かれた歴史実践を行うために試行錯誤しているところだとも言えよう。果たしてその試行錯誤が X 集落の多くに受け入れられるような別の歴史に辿りつくのかどうか、あるいはまた異なる歴史に転じるのかは今後の経過を待つよりない。

7. 結論にかえて—経済成長の「罪責論」?

A 氏の世代がどのように経済成長期の自身に向き合うのかということが、今後の X 集落の行く末を左右する要素のひとつである。集落に「帰ってきた」彼らがただ近過去の趨勢を見、それを苛烈に批判するだけで、共同性の想起が重要だと言うとしたら、すぐさまその位置取りを問い返されてしまう。あるいは、共同体の再構築という試み自体が、自身を他者から切り離す独断論になりかねない。

この状況は X 集落に限られたものではないだろう。X 集落の人々の思考を参考に A 氏を含めた集落住民はどれほど「有罪」なのか、果たしてこの溝を超えることができるのか考えることには意味がある。改めて問われるべきなのは、急激な社会変動の中で一個人にどれほどの選択肢やその後の帰結への予見があったのか、あるいは圧倒的な時代の「風潮」

の中で一個人はどれほど生き方や社会への関わり方の幅を持ち得たのかという疑問である。今後、ますます集落は、戦後日本の経済成長や「成長の記憶」の再検討に関心を持つ研究者にとって不可欠な場になっていくだろう。

このとき筆者が読み直すべきだと考えるのは、たとえば米山俊直著『過疎社会』である。人々が農山村に視線を向けるとき、しばしば何らかの大きな社会経済システムにおける農山村の位置づけをまず考えがちである。次に、農山村が抱える「社会問題」や「社会病理」に目を向け、政策的議論を進めることになる。

一方、米山は「過疎論はもういちど、個人の行動を出発点として組みかえてみる必要がある」と述べた（米山、1969、29頁）。米山は「社会問題」の発生場所として農山村を取り上げたのではなく、個人にとっての「問題としての社会」の行く末を考えようとしたと言ってよい。農山村の住民が直面するのは敗北感や痛みを伴う経験ではある。と同時に、これまでの来歴を再点検し、生き方を再構想する機会にも繋がっていることも米山は見逃さない。米山は、ある森林組合の幹部の証言を記録している。

眠れないとき……いったいだれが棺を作ってくれるのか、ちょっと考え込んだが、ひょっと気づいた。心配いらん。棺も桶も、買うてかえれる。五条でも、大阪でもなんぼでも売っとるやないか。でも、若いときからの木挽きが、棺桶を買うてもらうとはな（米山、1969、108頁）。

ここには生業の変化、後続する世代の減少、商品経済の生活の細部への浸透、モビリティの上昇、伝統的知識の無用化などが、両義的な評価や不安を伴いながら集約されている。米山はこのような変動期に生きる個人による点検作業を記録していったのである。

今日多くの集落で、私たちが、そして本稿で取り上げた人々が向き合っているのは、この「心配いらん」という言葉の帰結であり、再びそこでなされている点検作業である。多くの点検作業はやはり予想し得ない帰結を迎えたり苦い失敗を繰り返したりすることになるだろう。であるとすれば私たちがまず行うべきは、今と昔の点検作業が躓いてしまう、あるいは躓いてしまった石の形を当事者の経験と共に見定めていくことになるだろう。

A氏も会報で取り上げたトンネル工事についてその参加者に聞き取りをしていたことである。1930年代前半生まれの男性は、良い調度品に囲まれた部屋で当時を回顧しつつ、筆者に次のように語った。

私たちはね、間違っただのかもしれない。あ、いや、子どもにいい教育を受けさせたいとか、もっと便利になりたいというのが間違えていたというんじゃないんです。それはいいことなんです。それを願ってやったんですからね。だけどね、いろいろ教育とか、便利さだとかをどう使うかというのを、考えてなかったんじゃないかなって思ったりもするんだけどねえ。間違えたのかなあ。

自分たちは「間違っただ」のではないかという苦い確認がこの証言にはある。しかし彼は教育や便利さをどう使えばよかったのかという問題をすぐさま改めて立てた。この姿勢は経済成長期になされたことを見直しながら、なし得たことや、なされるはずだったことを現在に丁寧につなぎ直し、取り返していくということにつながるかもしれない。本稿は、現場においても過去の村落研究を読み直す作業においても、こういった検討を進めるにあたっての出発点を歴史実践論を手掛かりに明確にする試みであった。

参考文献

- Denning, Greg, 1996, *Performances*, Melbourne: Melbourne University Press
 グラック、キャロル、梅崎透訳、2007、歴史で考える、岩波書店
 原山浩介、2009、農村社会を規定する「多様性」の政治、平野敏政編著、家族・都市・村落生活の近現代、慶應義塾大学出版会
 保母武彦、1996、内発的發展論と日本の農山村、岩波書店
 保莉実、2004、ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践、御茶の水書房
 鹿島徹、2006、可能性としての歴史—越境する物語り理論、岩波書店
 中田英樹、2001、開発理論としての〈〈活性化〉〉言説の構造分析試論—言説空間において住民はどのように主体たり得ているか、村落社会研究、7（2）
 宇野邦一、2003、反歴史論、せりか書房
 山下裕作、2008、実践の民俗学—現代日本の中山間地域問題と「農村伝承」、農山漁村文化協会
 米山俊直、1969、過疎社会、日本放送出版協会